

精神科医の思うこと②⑥

思い出のカフェ3つ

松村 奈奈子

私と旦那、2人ともお酒を飲まないなので、その代わりに趣味のひとつが「カフェめぐり」。近所でも旅に出ても、いろんなカフェを訪ねるのが楽しみです。

昔はふと目に留まったカフェに入る時「美味しいのかしら、美味しくないのかしら…」「ボッタくられたりしないかしら」と、入るのをためらったりすることもありました。もちろん賛否両論はあると思いますが、スマホを持ってからは目に留まったカフェをちょっと検索して、コメントやメニューをチェックして気軽にチャレンジできることが増えました。そこで先日、キョーレツに思い出に残るカフェに出会ったので、そのお店を含めて、今回のテーマは「思い出のカフェ3つ」

キョーレツなカフェに出会ったのはコロナ第7波がくるちょっと前、山陰地方の波音しか聞こえない、たった120軒の小さな漁村に泊った時です。漁村に入る狭い道にひっそりと「カフェの駐車場」の看板がありました。さっそく行ってみようと、宿からもらった村の散策マップを見ましたが載っていません。こういう時、とりあえずスマホで検索。さすがネット社会、こんな村のカフェでも行った人のコメントと地図がでてきました。美味しい珈琲のようなのでスマホに案内されるまま、村の小道を入り奥に進みます。するとそこには、小さな看板が掛かった普通の民家があらわれました。なかなか人を寄せ付けない外観です。「こんにちは」とドアを開けると、人を拒む様な店構えとは裏腹に、気さくなマスターが優しくカウンターに招き入れます。中は落ち着いたカフェ風で、マスターは白シャツに黒ジャケットでキメています。むむっ、あの外観なのに人懐こいマスター、このギャップは何なんだ？と謎に包まれていると、珈琲の準備が始まりました。その時、店の空気は一変し、マスターはドリップに命を懸けんばかりに集中します。私たちが声を出すのも躊躇うくらい、凜とした時が流れました。珈琲を入れ終わると、「こんなんですけど、人は好きなんですよ」と再びマスターは人懐っこく私た

ちに話しかけます。

その夜、あまりにも不思議なマスターが気になって検索すると、どうも東京の下町で繁盛店をたたんで、この村に来たようです。我々はすっかりマスターに魅了されたので、翌日もお店を訪ねました。素直にネットで東京から来た事を知ってしまったと伝え、小さな漁村に辿り着くまでの話を聞きました。東京でメディアに取り上げられた事をきっかけに、自分のスタイルで珈琲を提供できなくなった事が小さな村に来た理由のひとつという風に、マスターは語ります。いろいろ悩んだ末に、今は“食べログ”はもちろん情報誌や村のマップにさえ掲載を拒んでいるといいます。それでも、我々が検索してたどり着けたので、村を訪れた人や情報の隙間をすり抜けたお客さんを受け入れているようです。2日とも訪ねた時には、お客は我々だけでした。思わず「生活できてるの？」と聞くと「できるわけじゃないじゃないですか、スーパーでバイトしてます」と答え、さらに「この村で骨をうずめるの？」「そのつもりです」とマスターは笑って話します。自分の珈琲を提供するスタイルにこだわり、漁村に暮らし、それを生活の糧にはしない、なかなかキョーレツな生き方です。東京から昔のお客さんが訪ねてくるといいます。その魅力、わかる気がします。雑談の中で、私と同じ大阪の街で育ち、高校の後輩だった事がわかり、より愛しい気持ちになりました。私たちがまたいつか、マスターに会いに行きたいなと思いました。

もうひとつの忘れられないカフェは、四国の瀬戸内海が見下ろせる小さな町の絶景の丘の上にあります。丘の上の展望台に行った帰り道、ふと小さなカフェが目にとまりました。週末しか営業していないと看板にあり、既に中にお客さんが美味しそうに珈琲を飲んでいました。引き込まれるようにお店に入ると、小さなカフェですがお店の半分は、写真などの作品が展示されているギャラリーでした。初老の女性が暖かく迎え入れ、「よかったら、作品も見ていってくださいね」と話します。珈琲を頂いた後ギャラリーを見ると、プロっぽくない芸術作品と若い女性の作家の写真がありました。作家さんはこのカフェとどんなご縁があるのかな？と不思議に思いながら見させて頂きました。この店もまた、カフェとしての経営でお店を続けているのではなく、何か思いを持っているお店のような印象を受けました。お店は繁盛していて、ほどなくお店を後にしたのですが、どうも気になってまた検索してしまいました。そこには、他のお客さんが聞いたこんな内容が書かれていました。初老の女性は、事故で娘を亡くし、ギャラリーの作品は娘さんの作品であること、娘さんを思う友人たちが、気楽に来てもらえるようにカフェを始めた。そうか、亡くなった娘を思う母親のカフェだったのかと、こういう思い方もあるのかぁと思いました。と同時に、初老の女性の悲しみを思うと涙がじわっと出てきました。

そして最後に、私が一番印象に残っているカフェは、ドライブ旅の途中に出会った森

の中のカフェです。お店に入ってすぐ「あれっ」と驚きました、奥で調理をしている女性は数年前に転勤するまで診ていた昔の患者さんによく似ています。

ところで、私は自分の患者さんに、病院以外で出会ったときは自分から声をかけない様になっています。患者さんの中には、精神科に通院していたり、通院していたという事を、周囲に隠しているケースもあるからです。だからちょっぴり、避けてしまう事もあります。

なので、この時もお店には別に女性スタッフもいたので、女性に背を向けて座り、視線を合わさない様にしていました。美味しい珈琲を頂きながら、診察していた時の事を思い出します。夫からのDV被害の女性でした。小さい子供を抱えて、どう別居し、離婚していくか一緒に考えました。DV被害女性の典型で、女性自身の父母はたよりになりませんでした。まずは女性自身が仕事を始め、女性友達を作り、仲間に相談して、仲間の力をかりて別居したところで、私は転勤で別の病院に行くことになりました。とても聡明で魅力的な女性で、「いつかお菓子作りの勉強をして、お店を持つのが夢です」と話していたのを思い出しました。そうか、本当に頑張ってお店を持ったんだーと、よかったなぁと嬉しい気持ちでいっぱいになりました。

帰りも顔を合わすのをさけて支払いは旦那にまかせて、先に私は店をでました。車で待っていると旦那が走ってきて「奈奈子先生のご主人さんですか？って聞かれたよ。お話をしたいって」と言います。後ろから、女性も走ってきます。「なんで声かけてくれないんですか？」「スタッフの方がおられたので」「あれは娘ですよ」と笑って話します。そうか、娘さんか一大きくなったなぁ、親子関係もいい感じなのかーとさらに嬉しくなります。私の転勤後、お菓子の勉強をして、縁あって出資者に巡り合い、お店を開店させたと言います。精神科の通院はとっくに終了して「今は幸せです」と女性はいいます。この言葉、精神科医が一番聞きたい言葉です。帰りの車の中で、頑張ってきた女性を思うと、じわっと涙が出ました。うーん、この仕事をしてきてよかったなぁと思わせてくれたカフェでの再会でした。

カフェだけでなく、人はいろんな思いで職業選択や行動を始めたりしますよね。居酒屋でもオーナーの思いのこもったお店もよく見かけます。ただ、お店を経営ではなく、何か自分を納得させるために続けているお店にあうと、その思いをいっそう知りたくなります。私の好奇心を満たす、ワガママな思いなんですけどね。そして、スマホのおかげで、カフェ巡りは簡単になった一方で、スマホの情報で簡単に繁盛したりする社会に抗うマスターに出会ったりすると、悩ましいです。でもいい出会いが多いので、好きなカフェ巡り、スマホを使って今後も続けるつもりです。

今回はただ、思い出に残るカフェをいろいろ思いながら書いてみました。